みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「共同研究」をふりかえって：意義と実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 克己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001133

「共同研究」をふりかえって――意義と実践

田村　克己
国立民族学博物館

あらためてふりかえると，共同研究が始まってすぐに東京の武蔵野病院で行われた研究会「エスノグラフィーの実践――医学・医療に於ける医療人類学の可能性」は，この研究のそれからの道筋と意義を示していたように思われる。この時の研究会には研究者だけでなく，医師や看護師などの医療関係者が百名以上も傍聴されていた。人数の多さもさることながら，参加者が研究発表や議論を熱心に吸収しようとする姿に驚かされた。そして，「エスノグラフィー」の方法論が精神医療の分野を中心に期待されていること，しかしながら，その内容や意味について十分な共通理解のなされていないことを改めて認識させられた。この共同研究は，そうした事態に対し人類学者がどのように応えていくかという試みである。そこでは「エスノグラフィー」にとどまらず，例えば個人を社会全体につなぐ視点といった文化人類学の特徴的な方法論が他の領域や応用の場においてどのように活かされるのかなどを議論してきた。その成果は本報告書に示されたところであるが，応用人類学がともすれば陥りがちな具体的事例の報告にとどまることなく，方法論の深化を追求している点に，この共同研究の一つの意義があると考える。

先の研究会は言うまでもなく，国立民族学博物館の外で開催されたものである。そして，この共同研究は館外での開催を積極的に行ってきたことに特色があり，そこにもう一つの意義がある。それは，「現場」への接近という意味においてである。人類学者はフィールドワークにおいて「現場」に向き合い，あるいはその中にありながら，ともすれば研究の面において「現場」から離れてしまいがちである。結果として文化人類学は，社会に役に立つかどうかについて明確な展望を拓けないままでいると言ってよかろう。館外開催の研究会等において医療や保健の「現場」に携わっている方々とともに議論し，それをふまえて共同研究を進めていったことは，人類学者の依ってたつところと，この学問自体を改めて問い直すものであったと考えている。

ちなみに，共同研究会の館外開催は，公募のこの共同研究からの提言が一つの契機になって実施されるようになった。外部の者が新たな可能性を開くという意味で，研究者の研究自体に於ける一つの「実践」として，これも意義深いところである。